

# セラミックタイルで 街並みに貢献する現代住宅

高口 洋人

今回ご紹介する住宅は、東京都杉並区の西荻窪駅から少し歩いた閑静な住宅街にあります。「西荻窪の岩」と名付けられたこの住宅は、白いセラミックタイルで外壁が覆われ、周囲の街並みや景観に貢献したいというお施主さんの思いが感じられます。

4人家族が暮らすこの住宅は、デザインと社会との繋がりを重視する建築家、(株)オンデザインの西田司所長と中川エリカさんの設計によるものです。

まず目に入るのは前庭にある大きな松です。土地の購入時からあるこの松は、お施主さんの強い希望で残

されたそうです。周囲は古くからの住宅地で、周りの住宅を見わたすと前庭や生け垣を作って環境を良くしていこうという雰囲気を感じ取れます。お施主さんの希望も、松を活かし、家を建築することで周囲の環境を少しでもよくしたいとのことだったそうです。

このお施主さんの希望を受けて西田さんらが提案したのが、平屋にして高さを抑え、建物を塀で囲まず、建物を通りに露出させるプランでした。通りに直接面する壁はプライバシーの確保から窓を大きくとれません。その代わりに中庭を設けて内側に開く、南欧のパティオのような設計でした。このような設計では、通りに面する壁の面積が大きくなります。この壁が周辺住民にも愛され、街並みもより良くなる材料はないかと外壁等の施工提案も行う(株)スカラと検討して、セラミック製のタイルを使用することとしました。

白い外壁にしたいというのはお施主さんの希望だったそうです。しかし普通の白いタイルではツルツとしすぎて公共建築のようになってしまう。そこで灰色の未焼成タイルに白い材料を練り込み、焼成後に白いムラができるよう工夫したタイルを使うことにしました。さらに施工後に目地材を塗りつけて手作業の跡を見せ



図1 「西荻窪の岩」と名付けられた住宅。前庭の松は元もとあったもの



図3 雨のかかり方により、風合いに違いが出始めた外壁



図2 元のセラミックタイルと仕上げ済みのタイル（中川エリカさんが持っているのが元もとのタイル）



図4 風雨により味わいが出始めた壁（上段）と竣工後の状態が良く残っている壁（下段）



図5 余ったタイルはお施主さんのアイデアで沓脱石として使用

て雰囲気が出るようにしました。実際、雨に濡れると元の灰色に近い色に変わるだけでなく、光の当たり方でその色合いが変化すること。取材した日も、庭木が作る影とタイルの白が大変美しいコントラストを作っていました。

西田さん曰く、「セラミックという材料は年々変化し、味わいが変わる生きた材料です。通りから眺める人も含め、住む人と共に変化することで建物に対する愛着が生まれることに期待しています。」とのこと。

竣工後二年程たつ中庭側の壁には、雨だれが流れるところや庭木が成長して陰ができる場所、葉がこすれるところは、微妙に表情が変化してきており、お施主さんもその変化を楽しんでいるようでした。このセラミックタイルは外装にしか使われていませんが、こんなに良いのなら内装にも使えば良かったと、お施主さんも少し後悔しているとのこと。暖炉やストーブの炉台などに使えば楽しいと想像は広がります。ふと中庭をみると、そこにはお施主さんのアイデアでタイルが沓脱石として活用されていました。

西田さんは、愛される住宅における材料の手作り感の重要性を指摘していました。こういう手作り感があればこそ、セラミックタイルには味わいが生まれ、使用できる場所にも広がりが生まれるとのこと。例えば床に使えば外壁や内装と連続した、セラミックタイルで囲まれた新しい空間も作られる。また、セラミック系材料の物理的な特徴に着目すれば、熱容量が大きい



図6 西田司所長と中川エリカさん、お施主さんと筆者（左から）

ので、外装や内装に使用することで大気や日射の影響を和らげ、室内の環境もより穏やかになります。北欧やフランスでは、レンガやセラミックを日常的生活空間に取り入れています。日本の生産地、例えば常滑などの窯場がどんどん閉鎖されている現状を考えると、公共建築に限らず一般の住宅でも、もっとセラミックが使われるようになればと期待します。

一方でこの住宅の外壁すべてがセラミックタイルで覆われているわけではありません。見えないところはメンテナンスの負担を抑えるため、表面撥水性のあるナノコンボジット系の塗料を使っていました。美しい経年変化を楽しむところとそうでないところのメリハリもこの住宅の魅力の一つなのかも知れません。

実際、通りすがりに立ち止まって家を眺める人は多いとのこと。ご近所さんや近くの工事現場に通う左官職人らしき人から「いい家ですねえ！」「大変だったでしょう（いい意味で）」と声をかけられたこともあったといいます。周囲の環境に少しでも貢献したいというお施主さんの思いはどうかや達成されているようです。

最後になりましたが、今回の取材に快くご対応くださいましたお施主さんご家族、西田司所長、中川エリカさん、それから取材に同行していただいた編集委員の鈴木義和先生（高校の同級生で、卒業後20年余りにして初めて一緒に仕事することができました）に厚く御礼申し上げます。

■筆者紹介 高口 洋人

早稲田大学理工学術院建築学科 准教授 専門は省エネルギー建築や環境共生都市の設計プロセス、「見える化」による行動誘導。著書に「完全リサイクル型住宅Ⅰ、Ⅱ」「地方都市再生の戦略」「都市環境学」「健康建築学」,「ZEDbook ゼロエネルギー建築 縮減社会の処方箋 (訳書)」など。

■(有)オンデザイン <http://www.ondesign.co.jp/>

■(株)スカラ <http://www.scara.co.jp/>

[投稿歓迎-編集委員会では「ほっと」spring 欄への会員からの投稿を歓迎します。編集事務局までご一報ください。]